



「劇場」は広場のようなもの
人が集まり、文化が生まれる。
劇場にかけ、舞台上の役者と共に時間を過ごすのは魔法のような時間だ。こまつ座主宰として、井上ひさし作品を世に送り出している井上麻矢さんに、芝居の魅力とこれからを伺った。

photo:Satoshi Imai text:Yuko Yanai

『私はだれでしょう』の舞台上。高い演技力が求められるこまつ座からは多くのスターが生まれている。

社長だ。麻矢さんは続ける。
「こまつ座にとって新宿の紀伊國屋ホールと紀伊國屋サザンシアターTAKASHIMAYAは、多くの作品の初演をかけてきた特別な場所であり、ホームグラウンドです。地方や別のホールで公演をして、サザンシアターに戻ると『ああ、故郷に帰ってきた』という気持ちになります」
麻矢さんの父であり、日本を代表する作家、井上ひさしさんは演劇をこよなく愛した。自身の戯曲を上演する制作集団「こまつ座」を立ち上げ、人気作家として多くの締め切りを抱えながらも、演劇という大変な仕事を最後まで手放さなかった。
その井上さんが、自分の跡取りとして麻矢さんに劇団を託そうとしていた、まさにその時、病が作家を襲ったのだ。
麻矢さんが社長になり、井上さんが亡くなるまでの7カ月ほどの間、毎晩、真夜中に電話がかかってきたそう。朝まで続くこともめずらしくなかった、その電

「父」の井上ひさしは『劇場は広場なんだ』と、よく言っていました。ヨーロッパの都市には必ず広場があって、祭りや何かあると人々がそこへ集まったように、都市化された現代では、劇場が広場の代わりなんだ、と。劇場がある場所に人が集まり、そこから文化が生まれて、都市を形作っていく。だから劇場は大事なんです」
そう語る井上麻矢さんは、38年続いた「こまつ座」の代表取締役



今年秋に上演された『私はだれでしょう』の台本とパンフレット。
2021年3月には10年ぶりに『日本人のへそ』が上演される。